

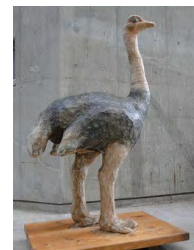
はじめに

自然災害のカタストロフは、人間のあたりまえの日常を寸断してしまう。被災者は、ある日突如として「昨日と繋がらない今日」を生きること強いられる。そこには「被災者」という言葉で括られるとみえない、一人ひとりの物語がある。作家の辺見庸は、「類化しない 続べない かれやかのかのじょだけのことばを／百年かけて／海とその影から掬え／砂いっぱいすくの死者にどうかことばをあてがえ (抜粋)」¹という詩を東日本大震災後に綴った。被災者の経験は他人事ではなく、(わが身にも起こりうる)可能性としての自分自身の物語である。当事者でない者が復興支援に携わる時、その一つ一つにどう寄り添えばよいのであろうか。

被災者の命に寄り添うには、衣食住の充足、環境復旧や生活再建、医療面のケアなど多方面からのサポートが必要となる。その中には「心」に関するアプローチも含まれる。当事者はもちろん、当事者以外の人々も含めた「意識」や「イメージ」への働きかけである。筆者は、その役割を担うもののひとつに「アート」があると考えている。アートは人々の意識を喚起・継続させ、新たな関係性や価値を生み出し、より生きやすい方向に歩き出す契機を与えてくれる。本授業は、芸術実践者である筆者の活動事例をもとに、復興支援とアートの関係について共に考えるものである。

1.東日本大震災支援「福岡エルフの木」

2011年3月11日、東日本大震災における福島第一原子力発電所事故は、世界に大きな衝撃を与えた。特に筆者は、被災地の妊産婦や子供達の状況に思いを馳せていた。私事になるが、9.11同時多発テロ(2001年)のショックで自分の出産が大幅に遅れた経験をもっていたからである。不安や動揺などの心理的負荷は、妊産婦や子供達の心身に影響を与える。そこで、被災地を継続的にエンパワーメントする姿勢や心を届ける方法として発想した取り組みが「福岡エルフの木」である。福岡県糸島産の無農薬野菜を、福島県(郡山市、白河市、いわ



《エルフの木》2011年 217×150×60cm
第85回国展、九州大学アグリバイオ研究

¹ 辺見庸「死者にことばをあてがえ」『眼の海』毎日新聞社 2011年 pp.47-48. 高見順賞受賞

き市)の助産施設、子育て支援施設、および仮設住宅へ、週一回送付する活動である(2011年から現在まで継続)。2016年4月の熊本震災からは、熊本の有機野菜を福島に送付している。福岡と、福島、熊本をあたたかい意識でつなぐことを念頭において活動している。活動名は絵本『かたあしだちょうのエルフ』から発想を得ている²。ダチョウのエルフは子供たちを助けたのち、彼の涙は泉に、体は木となり荒野の動物たちに憩いの場を与え続ける。実は、この絵本にインスパイアされたダチョウの彫刻の制作中に、東日本大震災が起きた。災害に関わりながら、真摯に生きる人々の姿がエルフの木に重なり、本活動の着想を得た。

心を砕いた点は、「忘れていない」というメッセージを、無理なく長く送付し続ける「仕組み」を作ることであった。野菜到着時に送られてくる支援先の近況報告や画像は、その都度 Web で紹介している。報道に取り上げられることが少なくなったからといって、被災地の状況がすべて解決したわけではない。報告の中で垣間見える彼・彼女たちの考えや生き抜く姿を伝えていくことも活動の一部である。

(<http://elfinfukuoka.blog.jp/>)

2.熊本震災支援「板倉の家ちいさいおうちプロジェクト」

2016年4月14日-16日、熊本地震が起こった。余震回数が多かったことが、避難者の車中泊を増加させる原因となった。震災の犠牲者204人のうち「災害関連死」は149人となり、震災時の直接死50人の3倍となった。「エコノミークラス症候群」(肺塞栓症^{そくせん}など)も含めて車中泊後に亡くなった人は少なくとも33人とされる³。熊本震災直後、「福岡エルフの木」の支援先である福島の助産師の方々が、避難所の在り方について助言を送ってくれた。「(東日本大震災後の避難所で)今でも思い出すのは小さい赤ちゃんより2歳半から5歳位までの子どもの方が恐怖で顔色がなかったという印象です。自閉症や多動障害などの子どもをもつご家族も大変苦労していました。避難所の中で仕切りをつけスペースを設けてあげてください」「原発を止めるという判断をしない政府の動きに、私たち福島県の体験は何だったのか悲しいです。涙がでます」「あと数日でものが溢れてきます。子どもがいるからと、おむつやミルクを置いていかれて困っている人もいました。支援



おのきぐ『かたあしだちょうのエルフ』ポプラ社 1970年



「野菜送付風景 (NPO コミュニオン with 助産師)」
2011年5月



「宇土小学校避難所
寄贈パーティー」
2016年4月



「宇土小学校避難所」
2016年4月

² 小野木学『かたあしだちょうのエルフ』ポプラ社、1971年

³ 「朝日新聞」2017年2月21日

物資をコントロールすることは大変です」地震翌日には、被災地(宇土市)の避難所の様々な情報を提供してくれた。福島を支援する団体が熊本にあり、その関連だという。日頃どれだけの信頼できる人との繋がりを得ているかが、(防災も含めた)災害時の対応を左右することを実感した。

熊本震災をうけて、阪神淡路大地震の際の避難所での経験を語ってくれる方もいた。「私の親族は避難所になった小学校の校長でした。毎日リュックいっぱい握り飯をつめて避難所に通っていました。ひと段落したころ、突然亡くなってしまったのです。熊本の被災者の方、特に被災しながら救助をされている方に意識的に休んでほしい、と伝えてください。」「避難所の風呂には、なぜか見張りと呼んで一人の男性が張り付いていました。女性たちは入浴をためらっていました」被災者でありながら支援する側にいる方々の負担、避難所におけるジェンダー関連の問題は深刻である。

熊本の避難所で聞き取りした声をあげると以下の通りである。「着替えは車の中。車の窓に目かしく用のカーテンがほしい。/血圧が下がらない(市の職員)。/乾きもの(パン)はつらい。炊き出しが嬉しい/ネットやSNSで情報が拡散すると、人やモノが集まりすぎてしまうので怖い。/采配する人が少なく、ボランティアをさばけない」今後の課題となるが、避難所初動時、教室ごとに女性、子連れ、障害者関係者の部屋などグループ分けする仕組みと人材育成を行うこと。また支援物資の需要と供給を繋ぎ、充足したらストップするシステム作りが必要である。

福島の建築士(辺見美津男)が熊本震災をうけて次のようなメッセージ⁴を投げかけた。「震災の時は、その人に寄り添い心の叫びを聞き、見えないものへの想像力を養うことが大切である。建築家である前に、人であれ」この言葉は、復興支援に関わる人間にとって最も重要なあり方を指し示している。災害の苦難に直面した経験者の知恵を集約し活かしていくことも課題のひとつである。

熊本震災の余震が続く中、家屋損壊を恐れる被災者の不安を和らげるために、「板倉の家ちいさいおうちプロジェクト」に取り組んだ。自宅敷地内に板倉構法⁵による避難小屋を建てる提案である。また地域の



「西原習合堂」2016年6月

⁴ 辺見美津男「JIA九州支部緊急会員集会講演」2016年4月23日アクロス福岡

⁵ 壁塗りを行わない木造建築の伝統構法。筑波大学名誉教授の安藤邦廣が中心となり、東日本大震災における福島県仮設住宅建築に用いられた。安藤は板倉構法による熊本震災支

木材資源を活用し、森と人の暮らしを繋げようとするものである。2016年6月には、寄付された杉材と大工有志、ボランティアの協働により、熊本県西原村に「西原習合堂^{しゅうごうどう}」(西原村商工会主催)を完成させた。アート関係者によびかけ、損壊家屋の廃材を再活用して木工品を作るワークショップも同時に開催した。また、森と暮らしをつなぐ復興住宅というコンセプトのもと、子供達と森づくり体験「西原村宮山ヒノキの伐採、枝落とし体験ワークショップ」を行った。



「西原村宮山ヒノキの伐採、枝落とし体験」
2017年3月

3.九州北部豪雨災害支援「災害流木再生プロジェクト」

熊本震災の翌年(2017年7月5日)に、九州北部豪雨災害が起こった。熊本震災支援のメンバーである朝倉市の製材所の方が被災。森の資源活用と防災を繋げようとした矢先に、九州北部豪雨災害では、約21万トンの流木が被害を拡大するという事態となり、関係者は深く心を痛めた。九州大学では異分野の研究者が力を合わせ「九州北部豪雨災害調査・復旧復興支援団」として、甚大な被害の調査や復旧に取り組んだ。芸術工学研究院では、建築や、デザイン、アートの分野で復興支援を行うこととなった。そのひとつが、木や水に対する負の感情を少しでも軽減し、復興につなげる「災害流木再生プロジェクト」⁶という取り組みである。流木を活かした看板、家具、しおり作り、子供たちへの木育ワークショップ等を行っている。



「松末小学校」2017年7月

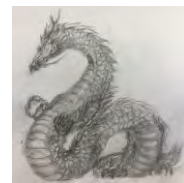


「流木集積所(旧朝倉農業高校)」2017年7月

その中で、知足研究室では学生達がデザインした流木しおりを販売し義援金にあてる活動をしている。また、統廃合される朝倉の小学生(松末、久喜宮、志波)に、「杉の香りとともに、母校の思い出しながら本を読んでください」と校名と校章を刻んだ流木しおりをプレゼントしている。流木が愛されるものとして再生し、子供達をエンパワーメントしてほしいと願っている。筆者は、樹齢132年の樟の流木の彫刻(水の守り神としての龍)を、被災地の小学校に寄贈することとなった。子供たちが地域を好きでいてくれれば、未来はあると考えている。祈りとは、厳しさに向かいあう命への終わらないエールのようなものだ。彫刻は一朝一夕にできない代物だが、この時間をかけるという行為こそ、再生への祈りに近づくものだと筆者は考えている。



「災害流木しおり」2017年11月



「災害流木彫刻の下絵」
2017年7月

援でも中心的な役割を担っている。

⁶ 田上健一教授、尾方義人准教授、知足美加子(芸術工学研究院)、杉岡世邦(杉岡製材所)が中心となり行っている。

4.アートと復興支援

復興にあたって、その地域の文化への理解は重要である。九州北部豪雨被災地は、英彦山文化圏との関わりが深いところである。修験道は古来より自然そのものを神仏と考え、木と水を大切にしてきたところである。筆者は英彦山修験者の子孫であり、自然環境への視座が自らの芸術観の根幹を成している。

【二風谷プロジェクト】

自然環境があってこそ文化が伝承されるという考え方は、アイヌ民族の方々との「二風谷アートプロジェクト(1999年)」から学んだことでもある。北海道の二風谷ダムは、アイヌ民族が生活をしてきた土地に建設された。アイヌ民族である貝澤耕一と萱野茂は、国のダム計画に対して「二風谷ダムを盾として、人間としての権利を求め」訴訟を起こした(2008年までアイヌの先住性が認められていなかった)。「文化はモノ」とする国側と、「文化は自然環境」とし、自然と共に生きてきた先住性を認めてほしいとするアイヌ側の裁判である。1997年に「ダムは違憲である」との判決を得たにも関わらず、ダムは施工されてしまう。地域の歴史文化を意識しない開発や復旧復興は、住民の矜持や精神的支柱を奪うことにもなりかねない。携わる人間には、地域文化への理解と畏敬が必要である。

筆者は、二風谷で受け継がれてきた文化と営みを五感で感じ、考え始める仕組みが必要と考えた。ダム横にある貝澤所有のシケレベ農場に筆者の彫刻作品を設置し、その台座作りのサポートを不特定多数の方に呼びかけた。プロジェクト参加者は納屋に寝泊まりし、援農しながら制作を行った。アイヌ民族の先住性を示す銘文や作品設置を協働で行うという取り組みの中で、この土地で受け継がれてきた記憶の“存在”を、人々の心に何度も立ち上げたいと願った。

【中越地震支援・山古志村】

中越地震(2004年10月23日)の際、山古志村は孤立し、河道封鎖によって土砂災害に見舞われた。震災の翌年に行われた伝統行事「角突き(牛同士の闘牛)」が人々を励ましたという記事を読み、山古志村に向かった。宿泊した旅館「丸新」の主人の話で、彼が先代から横綱牛を育てていたことを知った。震災時は牛舎が斜面ごと滑落したところもあったそうだ。ペットの犬のために最後まで村に残ったこと(動物を連れて避難してはいけなかった)。再び村に戻ったときは、死んだ錦鯉などの死臭の上を、カラスが舞い地獄のようだったこと。メディアではわからない筆者の想像を超えたことがおこっていた。そのような



《回想-二風谷ダム》1998年
160×31×41cm 第72回国展、富永賞



「二風谷プロジェクト」
1999年



《山古志の角突》2010年
155×240×80cm 第84回国展、損保ジャパン美術財団奨励賞



「角突きのチラシ」2007年

状況下で、「角突き」という伝統的な祭りが地域の結束力を高め、復興を後押ししたことに感銘を受けた。その後、筆者は角突き牛と錦鯉の彫刻を制作し寄贈している。復興検証報告書では、復興における地域の「気持ち」の重要性が述べられている。

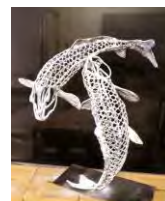
「自然災害を目の当たりにした時、大災害に対する無力感や喪失感から、どうしても気持ちが立ち止り、なかなか前に進む元気を持つことが難しくなってしまいます。(中略)

建物が100%再建されたというような数値によるものではなく、市民の感覚的な復興感が大切であり、人が前に進もうとするその気持ちが『復興』を前進させ、現実のものとしていくのだと考えます⁷

意識という目に見えないものが、復興へと現実を動かす力となる。住民と行政が議論を重ね、復興への意識作りに尽力したため、山古志村の帰村率は約5割⁸となっている。やまこし復興交流館「おらたる」(2014年～)は震災の記憶や地域の魅力を伝える場所であり、被災者がここから語り部として派遣される制度もある。「おらたる」とは、「私たちの場所」という意味であり、山古志村の矜持と地域愛がこめられた象徴となっている。

【東日本大震災支援、福島県浪江町・希望の牧場】

山古志村に牛の彫刻を寄贈した経験から、東日本大震災直後(2011年)、福島原発立入禁止区域内に残された牛の映像に見入ってしまった。牛達は突然地域から失せた人間側に向かって「なぜ？」と問いかけているような瞳をしていた。手間暇をかけた田畑や自宅、動物たちと別れ、故郷を後にした人々の辛苦に思いを馳せた。いつか帰ると信じて離れた人。いつか帰ってくると信じている牛、家、風景。その視線が交差するところにあるのは、様々な記憶と日々のリズムが染み込んだ「故郷」である。昨日と今日が繋がらないという亀裂を、私たちはどう生きればいいのかであろう。帰るべき場所が過去ではなく「未来」にあることをイメージして、鉄の彫刻《望郷の牛》を制作した。立入



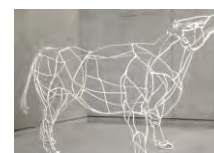
《水と風》2012年
70×45×35cm 第84回国展、
損保ジャパン選抜奨励展



「山古志村・丸新への寄贈風景」2010年



「浪江町への作品寄贈風景」2012年



《望郷の牛》2012年
163×240×83cm 第86
回国展、

⁷ 「小千谷市復興計画長期検証(総括)」2016年 p.21

<http://www.city.ojiya.niigata.jp/uploaded/attachment/4128.pdf>(2017年12月6日確認)

⁸ 牧紀男「災害・復興の影響評価と事前復興の取り組み」2015年

<http://www.boukakiki.or.jp/H27-4-2.pdf>(2017年12月6日確認)

禁止区域内である浪江町には、吉沢正巳が運営する「希望の牧場」がある。彼は牧場の牛を殺処分せず生かし続けることで、原発に依存する社会に異を唱えている。2012年にこの牧場に作品を寄贈した。その際、延々と続く無人の町の異様さに息を飲み、牧場で牛がくつろぐ姿をみてホッとしたことを思い出す。吉沢はトレーラーにこの作品をのせ「原発を乗り越える社会」を各地で訴えているという。《望郷の牛》は、私の作品の中で（公開されながら）最も移動したものではないだろうか。鎮魂と、力強い未来への提言の旅を始めた彼を応援している。

おわりに

本授業では、復興支援とアートとの関係について、芸術実践者である筆者の活動事例を中心に述べた。中越震災支援としての作品寄贈。東日本大震災支援「福岡エルフの木」、「希望の牧場」への作品寄贈。熊本震災支援「板倉の家ちいさいおうちプロジェクト」。九州北部豪雨災害支援「災害流木再生プロジェクト」、他にアイヌ民族に関する「二風谷プロジェクト」についても紹介した。アートは、人々の感情を揺さぶり、心の在り様やイメージに影響を与える。人々の意識を喚起・継続させ、新たな価値を生み出し、前を向く契機を与えてくれる。私達が「復興」というとき、そこには人の「心」が含まれていることを忘れてはならない。どのようなものも、人がまず心でイメージすることから始まり、現実化するのである。アートは様々な「巻き込み」や「関わり」を生み出し「serendipity（予期せぬ幸運）」を生み出すことがある。また能動的な動機付けを促す。

災害で苦しんでいる人がいれば、その人に寄り添い心の叫びを聞いてほしい。みえないものへの想像力を養い、発想し、行動することが、「昨日と繋がらない今日」を「あたりまえの今日」に変えていくのである。